

平成28年3月21日

ニッセイ緑の環境講座2016～持続可能な地域づくりの先駆者～

日時：3月21日(月) 13:30-16:00 会場：ニッセイ新大阪ビル13F

【テーマ】地域の文化、自然の魅力がよそ者を引きつけ、誇り高き林業の町、自治が息づく町の改革が加速。50年を見据えた人づくりに地域の存続をかける。

【講師】鳥取県智頭町 町長 寺谷誠一郎氏

一般財団法人地域活性化センター 理事長 椎川忍氏

<基調講演>

○智頭町の持続可能な地域づくりの取り組みについて

・今地方にはお金がない。お金がないから何もできないと諦めるのではなく、知恵を絞るのにお金は要らないので、お金がなければ知恵を出す。そしてここが肝心だが、自分に知恵が無ければ人の知恵を借りれば良い。智頭町には普通の町民が委員の百人委員会という組織がある。その中ででた町民の知恵に町の予算をつける。そうすると素晴らしいアイデアが一杯出てくる。既存の行政感覚からはその素晴らしさはわからないが、自分は行政経験が全くない民間人だったので、その素晴らしさが普通にわかった。このやり方には皆さんも想像されるように「議会無視」という批判が当然出てくる。小さな町が生き残る為には綺麗事ではなく、前に進むことができるものは必死に取り入れていかなければ、死んでしまう。議会の議論が町の活性化をもたらすなら、こんな面倒なことはしなくても良いが、そうでないから知恵を絞る必要がある。結果が駄目なら責任を取れば良い。

○まるたんぼう

・素晴らしいアイデアの一つは、今や全国的に有名な「まるたんぼう」。

Iターン組の西村早栄子の発した「こんな自然に囲まれた環境で子育てできるのは素晴らしい。」と言う一言がスタート。うんそれは良いと言ったものの、町立保育園があるので直接町から金を出せない。そこで、日本財団等外部から金を持ってきて予算を付けた。森そのものが幼稚園になり、子どもが自然の中で遅しく、感性豊かに育つ姿を2年間NHKが取材して全国放送した。更にその映像を海外に流した。結果、森の幼稚園が大ブレイクして無名の小さな町が、急に有名な町に変わった。

森の幼稚園は平井知事が県の施策に取り入れた。また、長野県は裏山の保育園という名前で全保育園での実施を目指している。そういった流れはどんどん広がり、16の自治体が平井知事先頭に文部科学省に働きかけ、国の施策への要請を開始するまでになった。全ては一人の女性の発言から生まれたこと。

今少しずつこのように山を教育の場としての活用することを目指している状況である。

このような自然の中での教育が注目を浴びると、都心部からの移住者が増えることにつながっていく。

○大麻栽培

・もう一つの例を紹介すると日本古来の麻の文化を蘇らせたいという若者がやってきた。最初聞いた時はびっくりしただけだが、話をするうちに面白くなった。しかし、どう考えても智頭町でそんな判断はで

きないと思ったが、大麻専門の弁護士を呼んできて、色々調べてみると何と大麻栽培許可権は知事の専権事項とすることがわかった。普通の知事と町長の関係だと「知事に断られる。無理だ。」で終わりだが、鳥取県という全国で一番人口の少ない県をどう立て直すかということに日々悪戦苦闘している平井知事とは、様々な案件で信頼関係が築けているので、これはひょっとすると何とかなるかもしれないと思って、知事にお願いに上がり、実現に漕ぎ着けた。ところが、「鳥取県知事 大麻の栽培許可」のニュースが流れると「何故そんな麻薬の原料になるようなものの栽培を許可したのだ！」という問い合わせの電話が県庁に鳴り続けた。暫くして収まった頃に今度は智頭町長の電話が鳴り続けた。どれだけおこられるかと思っていたら、実は電話の内容は「どうやったら知事に大麻栽培の許可をもらうことができるのか教えて欲しい」という問い合わせだった。勿論、知事と私の秘め事で教える訳にはいきませんという答えを繰り返すだけでしたが……。また、問い合わせ電話の中で教えられた大麻の用途にびっくりし、日本古来の伝統を守る為にも大麻は本当に必要なものと言うことが良くわかった。宮内庁からの電話には本当に驚いたが、麻布をもちいた麻苧（あさお）をつけた祓串（はらえぐし）は、現状では全て中国産のものを使わざるを得ないので、智頭町の大麻を使いたいとのことだった。また、花火屋さんからは大麻草の茎の中の「おがら」と呼ばれる木質部分からつくった炭が花火の弾ける範囲を拡大する効果があるので1t必要と言われた。1t大麻の炭をとるには、智頭町の耕地面積に匹敵する20ha必要でとんでもない話。大麻は大変有用な材料で国会でも大麻栽培の見直しが話題になっている。

このような世間から注目を集めた話も「何でもやってみよう！」という精神で取り組んだことがきっかけになっている。

○『お待たせしましたいよいよ田舎の出番です』

そこで4年前に『お待たせしましたいよいよ田舎の出番です』というキャッチフレーズを付けて町の動きを加速していった。その後、国の政策として皆さんご承知の地方創生の話が出てきた。

しかし地方創生が何故今必要なのか、何故そこまで地方が疲弊したのか、その原因は何かということを考えてみると、それは、まさに戦後政治の結果ではないか。戦後復興、繁栄の為に労働力として地方の若者を都市へ集め、そして日本は見事に経済大国となった。そして、お金持ちになった若者は都市で結婚し、家族ができて都市の住人となる。かつて日本社会を一次産業で支えていた地方の存在は薄れ、地方は中央の施策（税金での予算付き）を選んで実行するだけの存在と成り果てた。地方は頭を使う必要がなく、使わなくなってしまった。一方、都市には地方とは比べ物にならない程の人が住んでいるが、昔から地方にはあった地域住民の絆には無関心な競争社会の下で、都市は格差の大きいストレス社会になり、その病理現象も顕著になってきた。

○森林セラピー

このことを背景に、ストレスを何とかしないといけないという現在の問題が浮上してきた。現在の都市で暮らす人々のルーツは、山に繋がっている。だからこそ、森を活用した森林セラピーの展開を志した。この取組を初めてから、5年目を迎えるわけだが、取り組みを始めたときから日本での森林セラピー基地のトップランナーになることを目標に進めてきた。

しかし、企業・政府からは医学的にこのことを証明できるのか？ということを問われていた。そのため、大手企業10社と森林セラピー利用の協定を締結、各社5人が参加し、産業医が検証して明確な効果の発現を確認できた。93%山の智頭町を舞台にして 会社と国が折半して10社×300人を一ヶ月間森林セラピーで元気にさせる。更に、その業務を地図町内の各集落が請負、全て収入を得ると言う仕組みを導入した。そのお金をどうするのかも集落で決める。そこで初めて集落の活性化が進むことになる。次の段階では智頭町から鳥取県全体に拡げ、山を教育の場所、そしてストレスから解放される癒しの場としての活用を本格的に実施したいと考えている。

○山を使った教育 命の大切さ、自然分岐

日本に唯一の、森の中で出産できる仕組みを取り入れられないかという発想で取組みを進めている。森の幼稚園のまるたんぼうを活かして出生から子育てという流れを作り、田舎で子育てのスローライフを提唱していく。

ほとんどが山である智頭町は、材価上がるまでは頑張らないといかん、山を捨てるわけにはいかない。

○『智頭町おせっかい宣言』

そこで、『智頭町おせっかい宣言』を発動。大家族から核家族化し、子育ても密室化していることが様々な社会問題の温床となっている。おかしいことにはみんなどんどんお節介して、他人の意見で軌道修正させる。たとえば、子育てについても、いじめにあうと集落、家族がそのことに少しでも気づいていることがあれば、しっかり口をだして、問題が大きくなる前に周囲も一緒になって解決に知恵を出すという、おせっかいが必要ということ。

交付金に群がって金を如何に取ってくるかに血道をあげる政治に将来はない。薄っぺらな政治家も要らないし、文句ばかりの国民も要らない。もう一度原点に戻って、お節介溢れるコミュニティをつくることに正面から取組んでいくことが今最も必要なことである。一人ですとお節介は難しいが、地域が一体となってやっていくことでできる環境が生まれてくることから智頭町は皆でおせっかい宣言をした。

この前東京の電車の中で勇気を出してお節介をした。若い女性が電車の中での化粧をしていたが、誰も止める人はいない中、仕返しが怖かったので、降車駅の直前で大声を出して注意し、直に電車を降りた。

そもそも山を守らなければ地方創生は絶対に成功しない。しかし、地方創生の実態は良い案を持ってきたら、お金を上げますよという人参ぶら下げ方式で、山を守るという理念は何も見えない。しかし、見方を変えれば、国も処方箋を出せない訳で、現状は地方が「如何に生き残るか」の知恵を競い合う時代といえる。勿論、持続可能な地域にしていく為の必死の努力は必要だが、小さな無名な町が知恵と工夫で一躍トップランナーになるチャンスがあるということで、地方にとってこんなに夢のある時代はない。

【対談】

【椎川】

地方創生と言っても、現状では困っている自治体が多い。現状は国のこれまでの政策の結果でもある。また、国や自治体が人材育成を行ってこなかったことも大きな理由だ。その結果、自治体に現状を打開する知恵が無いことが最も深刻な課題。

地方創生に関して、平成26年10月8日に石破大臣に言った主なことは以下の通り。

- 1、人材育成（やっと平成27年度補正で10億円の予算が地方創生カレッジ関係としてついた）
- 2、一次産業が活性化しないと地方創生はできない。

今回の智頭町の例で言えば林業だが、国土の3分の2が森林であり、そこに手を入れると損するということでは地方がどんどん衰退していくのは自明の理。日本の山の蓄積量増加は年間1億立米に及ぶにも拘らず 国内消費量は2千万立米しかないのが現状で、自然に増加する森林資源を如何に使うかが大きな課題。その解決策としては、まずCLTだが、鉄骨に代わる構造材に使えることがみそ。今までは大臣認可が必要だったが、建築確認が一週間でできるようになれば大きく進むだろう。また、現在の建物を活かしながら、内装を木質化するというのも、建築確認等の手続きを省略できるようビッグファニチュアという手法も可能であり、あちこちで行われている。特に保育園、学校等は子ども達の学ぶ環境としても木が良いことが実証されているのもっと進めていくべき。更に建築以外の用途での木材消費量増には、木育の観点が重要で、子どもが最初に触れる玩具を木の玩具にしようというウッドスタート宣言を自治体、企業（アウディ、無印商品）が行っている。推進しているのは、東京おもちゃ美術館というクラウドファンディングで成功したところ。林業従事者は5万人しかいない。農業従事者はさすがに2百万人を超えている。山の問題が解決しないと地方創生も絵に描いた餅になる。

○寺谷町長のお話を聞いていて、こんな首長がいるのかと正直驚いた。政治を生業にしているのではなく、地元と密接に繋がり、地元のことをよくしていきたいというまっすぐな気持ちに共感した。1/0運動で有名な智頭町でもあり、まずは寺谷町長の原点である町長に就任したときの話について、苦労話や背景などを交えて、お話を聞いてみたい。

【寺谷】

元々政治については全くの素人で役場の仕事も知らない私が、ひよんなきっかけで町長になったので、当初は職員が私のことを馬鹿にしていました。そんな中で、折角町長になったのだから誰もやれないことをやろうと言う気持ちが強く、兎に角自分で行動するしか無い状況でした。まず、何の目処も無かったが山林王石谷家住宅の素晴らしさは智頭の財産だと思っていたので一般に開放して智頭の良さをアピールしたかった。ところが位高き石谷家の当主は全く聞く耳を持たず、途方に暮れていた。落ち込んだ気持ちで町を歩いていたら、石谷家の前で当主の奥さんにばったりお会いして、どうしたのですかと声をかけられた。さすがに憔悴きっていたのかもしれない。駄目元で奥さんに「実は」とお話ししたら、ちょっと待って下さいと家に入り、当主を連れて出てきたら、「あなた良いじゃないですか」と奥さんが言えば全て解決して、5日間だけの一般公開が実現した。これが大ヒットで石谷家の前の道路が大混雑になる位大勢の人がやってきた。京阪神からも観光バスで智頭まで来てくれた。これで町の持つ魅力が多くの人を集められるということを町民に示すことができた。

1 / 0 運動は智頭町の伝統として行われてきた集落自治で集落毎に10年間お金を出すが口は一切出さないという行政の関わりかたで、集落自治を育てた。私が行った百人委員会もそういった伝統の下に、新たな住民自治の姿として導入してきたもの。先ほど住民のアイデアが実った例を取り上げたが、百人委員会の高校生版をご紹介します。県立智頭農林高校が智頭町にあり、駅から高校に通う生徒達が智頭町役場の前を毎朝通る。あまりに元気が無いので、校長に事情を聞きにいったら、学力が全くない高校生で小学校3年生のドリルを毎日やらせているとの話だった。そんなことは止めなさいと言っても聞かないので、県教委に行って校長交替を訴えたら、校長が替わった。そこで早速高校生に百人委員会を開いて提案を考えさせた。そうしたら、智頭スギを使ったバス停の待ち合いを造りたいとのことでその提案に予算をつけたら、何と観光甲子園で一等賞をもらった。ペーパーテストで測れる学力より個性を大切にしていける方が大切だと思った。学校に通う子どもたちを智頭町の元気づくりの土台に出来ないかと考えていた。そして、次は智頭中学校の2年生に百人委員会設置してくれと何と校長から要請された。子どもたちが町のことを考え、“町を救う”ことをカタチに変えていく。中学校では、中学2年生に考え、中学3年生に実行することで町に残る取組みを子どもたちが主体的に行う形ができた。次世代育成が持続可能な地域づくりにとって最も必要なこと。

87集落を周り、一切要求型は認めないと言った。提案型に変われ。そして良い案が出て来たが自分たちだけでやるにはちょっと足りないと言うとき、その部分の予算は町が出すと言った。この点についての評価は分かれたが、町が生き残るにはこれしかないとの思いが強い。

自治体の職員には、常々三つ視点（鷹の目で遠くを見る。トンボの目（複眼）で多面的に備えること、自分の仕事は町民あってのことという根本認識に立つ）で物事を判断するように言っている。高い視点から物事を見ていくこと、そのことで、何年先にどのようなことが求められる時代が来るのか。もっと、考えを進めていくと、なぜ町長がいるのか、役場があるのか？ということの答えは、村民がいるからということが答えとなる。そのことを忘れてはいけない。小さな自治体だからこそできることは一杯ある。そのことを十分に考えない平成の大合併は課題があると思っている。

【椎川】

自分でやることと他と連携してやることをちゃんと仕訳して考えることがスタート。地域づくりのようなことは自分で考えないといけない。合併しても単独町政を選択しても、その部分がしっかり押さえてあれば、一緒のはずであるが、現実には起きたことは合併か単独かで0か100かの選択になってしまった。

【寺谷】

国の主導で合併するとお金はもらえるが、この合併ということは、町民にとってそれが本当にいいことなのかという必ずしもそうとは限らない。私は当時の町長として、智頭町は京阪神と繋がらないといけないとの主張で鳥取市との合併に反対したが、住民投票で合併賛成になったので即刻辞職した。

議会は半々と割れた。そして、最終的には議会が独立の判断をした。それから再度町長にと言われた。二度とやらないと言っていた手前、何ともぼつが悪かったが、若者に担がれて再度町長をやることになった。

【椎川】

寺谷町長は、普通の人が考えていることをそのままやっている人で、八方美人になりがちな政治家としては珍しい。政治家は大きな単位になればなるほど八方美人になって失敗するのが世の通例。

人口ビジョン＝将来の姿は集落ごとに意思を積み上げないと意味がない。昨今の人口減少ということは、誰もが未体験の人類史上初の理解できない大きな問題。政治や行政のレベルだけでは解決できない。智頭町のように山で暮らしてきた人たちが、もう一度山をもとにして地域を起こす。そして、持続可能な地域へと発展することを目的に、集落単位まで話をおろしていくこと、そしてそこで意思を形成していくことがまさに大切なところで、その点を徹底して議論するのが地方創生。集落の意思を集約していない目標では絶対に達成できない。例えば、鳥取市の課題ということ言われても、市内の小さな集落に住む人は実感できない。20年、30年かけて、100年続くサステナブルな人口構造を作り上げることで次世代に繋げていくこと。島根県中山間地域研究センター研究企画監で島根県立大学連携大学院教授も務める藤山浩氏によれば1%移住政策をずっと続ければ地域は持続可能であり、現実に長野県下条村、やねだん（鹿児島県鹿屋市串良町柳谷集落）は20年、30年かけて実現しつつある。現在の状況は、自治体消滅の危機と矮小化されているが、日本民族消滅の危機というのが真相であり、非常に根深い問題。そういう問題の捉え方をして初めて国民一人ひとりの課題として捉えることができるのではないか。

このような状況にあるとき、役場の役割が大切。人口構造がサステナブルになることが目的なのに、日本の今の政策はわかりにくいと思う。智頭町は山の町であって、自然循環の中での暮らしは、人本来の生活を感じることで人間性を回復させる。有畜循環農業の生活を経験することで子ども達の再生を図っている例もある。縄文文化、弥生文化の長い歴史と比べると、現代社会は瞬きくらいの時間しか経過していない。山の中、田んぼの中での生活が人間性復活に繋がることは当然であり、コンクリートジャングルがストレス社会であることも然り。このような地道な取り組みを進めていくと、移住者は増えていくだろう。このような側面からお話を聞かせてもらいたい。

【寺谷】

智頭町の若者も鳥取市に出たいという話が当然のようにある。そこで、引き止め策として智頭スギと智頭町の大工を使って家を建てるという条件で町有地を無償で使用させた。議会は大反対だったが、強引に押し切ったところ、3箇所実現し、結婚して6人、子どもが出来て町の人口が9名増加となった。さて、移住ということになると高齢者の山を町に寄付ないし涙金で取得させて頂いて、若者に山の手入れからスタートして、自伐林家を育成しようとしている。しかし突然若者に山仕事をやらせても何もできないのは当然なので、鳥取大学林学教授の退官に併せて智頭町に移住を依頼。鳥取大学元教授を講師として誘致し、智頭町への移住者に山仕事の基本から学ばせる仕組みを作り、その者に山を提供することで、智頭の山のメンテナンスを行っていく仕組み作りを行った。移住者への仕事、家、というものを準備することで、定住という希望が見える。

老人会の集まりで、高齢者の皆さんが智頭町の施策を支えるように頑張って頂けないかと投げかけた。高齢者の気持ちに訴えかけることで、例えば森の幼稚園では、その高齢者が山の整備、川にかけられた橋

の補修ということを地域住民として主体的に取り組みはじめてくれた。

では、このような高齢者を本格的に活用できることは何か？それは「農業」。高齢者の方はベテランの百姓でおいしい野菜を作るのは朝飯前。しかし、販売できないので、作った野菜も食べきれないで捨てるような状況であった。売り先を造ることで野菜づくりにも精が出て皆さんも元気になることができる。そこから考えたのが疎開保険だった。万が一災害が発生したら智頭に疎開できますよ。平穏な一年だったら智頭の野菜づくりのベテランが造った野菜をお届けしますというもの。このことがNHKで紹介されて、忽ち申込者が殺到。しかし、その四日後に東日本大震災が発生し、一旦は中止せざるを得ない状況になった。再開順調に契約もできて、智頭の高齢者の元気の源となっている。

<会場からの質問への回答：地方創生についての都市の役割、ふるさと納税について>

【椎川】

東京都は合計特殊出生率から見れば人口半減都市であり、日本全体の人口問題と言う意味では、東京を何とかしなければ本当に日本民族消滅となりかねない。地方創生を地方の問題と傍観者の態度で見ている、真の課題は見えてこない。当然のことだが、東京都も地方創生を進める中で持続可能な地域となるための対策を求められている。それは出生率の向上しかない。しかし、出生率を上げることは至難の業なので、若い人に東京から地方に移住してもらい人口増を達成しようという国の構想。東京が地方から人を集めて子どもを産めない環境を創り、その点についての抜本策が無い中で東京都への一極集中は是正しなければ日本民族消滅の危機を迎えるということだ。出生率を上げると言う観点で成功した都市は広島市。政令指定都市に移行した昭和 55 年(1980 年)以降、ドーナツ化により定住人口減少が続いていた。その後周辺部での分譲住宅供給などによって出生率が改善した。都市も地方も同じように、持続可能な社会には健全な人口推移が求められることから、どうやってそういう構造を造っていくのかを、住民一人一人が考えていくべきだ。

ふるさと納税については、あまり行き過ぎると税財政制度を壊す、自治体間の返礼品合戦のような様相を呈しているのはどうかと思う。

【寺谷】

智頭町もふるさと納税を行っているが、ふるさと納税がお金だけの関係になること（良い商品が安く買えると言う動機だけで肝心の自治体を何とかしようという気持ちがどこかに行ってしまうような状況）には反対で、ふるさと納税してくれた人と智頭町の絆ができ、ふるさと納税をきっかけにその絆が太くなっていくようなことを目指したい。森林セラピーまたは民泊の割引チケットを全員に配布するのも、智頭町に来て欲しいという思いから。

都市の役割と言うことで言えば、港区の区長は立派だ。平成 22 年 10 月施行の「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」では、都道府県及び区市町村に対し、この法に基づいて「公共建築物等における木材の利用の促進に関する方針」を策定するように求めている。これを受け、港区では、平成 24 年 4 月 20 日、区有施設等の内装を木質化し、木製什器等を積極的に活用する、23 区で初めての「港区公共建築物等における協定木材利用推進方針」を策定した。港区と伐採後の再植林を保証する協定を締結した協定自治体から供給される協定木材の利用を促進するとのことで、林業の町である智頭としては本当に有り難い取り組みである。都市で出来ることと問われれば、まずこの港区の例を思い浮かべる。森のある地域と一体となって取り組んでいこうという姿勢が素晴らしいし、都市から全国に向けて発信することの良さを感じる。